

祝福された 花嫁



黒川 文

目次

1.	
1.	3
2.	
2.	17
3.	
3.	25
4.	
4.	37

1.

1.

式の最中から、美紀はどこかからわからないが、誰かの刺すような視線を感じ続けていた。綺麗な花嫁の姿に見入っていると言うのんびりしたものではなく、その視線を受ける肌から相手の明確な悪意を感じていた。

厳肅なチャペルでの式を済ませ、美紀は新郎の武内一郎のエスコートで披露宴会場に向かった。さきほどの式での賛美歌での祝福とパイプオルガンの荘厳な音色、そして牧師による神への誓いの言葉が、まだ美紀の意識の中で続いていた。このまま、ずっと祝福されていた。

披露宴はこの小さな教会の隣にある綺麗な会場だった。元々は洋館を改装したレストランだったところで、料理にも定評があり、今日もこれからフランス料理のコースが出てくる予定だ。折角のご馳走だが新郎新婦は手をつける暇も余裕もないのは昨今の常識で、美紀も化粧が崩れたり衣装を汚していけないしと、そちらの方を気にしてあまり料理を楽しめなかった。

わざわざ、この式場を選んだのは美紀の方だった。友人の結婚式に出てみて、料理でもてなすの悪くはないと、負けじとフレンチのコースに定評がある場所を探したのだ。新郎の一郎はそんなことには無頓着で、一生に一回だけのことだからまあいいかと美紀のわがままを許した。

主賓である一郎の大学恩師の音頭で乾杯をして、その後、来賓の長い挨拶が続いた。

美紀は一郎と同じ会社に勤めていて、二年後輩に当たり、今年で二十八歳になった。元々付き合っている彼氏はいたのだが、やはり、同じ職場にいて上司の信頼も厚く仕事の出来る一郎に惚れてしまい、元の彼氏と強引に別れて一郎と付き合いだした。結婚の申し込みは一郎の方からだったが、実質は美紀が強引にそう言わせたに過ぎない。女子大の頃から付き合う男を取っ替え引っ替えしていると友人達には思われているが、美紀自身は純情派のつもりでいた。ただ単に相手の男に何か足りないと考えていたのだ。それに妥協してしまう人もいるが、あいにく美紀にはそれが出来なかったに過ぎない。

長い挨拶が終わり、客は料理に手をつけ始めた。美紀も少し手を出そうとしたがすぐに一郎の上司や、大学恩師、友人、親戚がひな壇に挨拶に来て、そのたびに一郎が立ち

上がって返礼すると、美紀も同じようにしないわけには行かなかった。料理もすっかり冷めた頃になり、衣装替えで一時退場した。

美紀が再び披露宴会場に戻ると、今度はケーキカットだった。このときとばかり美紀の職場の友人達がそれぞれスマホのカメラやデジタルカメラを持って集まってきた。

——ねえ、こっち向いて。

皆がそれぞれ勝手な注文をつけた。美紀はいちいち笑顔でそれに応じた。こんな写真は一生残ってしまうのだ。嫌な顔は出来ないことは熟知していた。

ケーキカットの後、歓談の時間に来賓の相手をして、少しだけ時間が出来たので、美紀は目の前にあったワイングラスを手に取り一口だけ飲んだ。お腹もすいていたしのども渴いていたのだが、気分が舞い上がって今まで気付かなかったのだ。のど元を過ぎていくアルコールの感触で一気に普段の美紀に戻った。

「ねえ、一郎さん。わたしも食べていいかな」

「食べていけないことはないだろうね。でも、メイクが崩れるよ。ほらワイングラスにも口紅がついてる」

一郎が細かいことを指摘した。美紀は嫌な顔でワイングラスについた唇の跡を拭き取った。今まで、一郎がこんなことを言ったことは余りなかったのだ。普段は優しい顔で、いいんじゃない、と言ってくれていたのだ。やはり、恋人と奥さんとじゃ扱いが変わるのかと不安になった。

美紀が一瞬うつむいて、再び会場に視線を戻した。楽しそうに会食している人たちを順に見ていくと、美紀の友人達は皆知っている顔だが、一郎の方は会社だけではなく大学時代の友人も多かった。そんなことは前もって知っていたが実際に知らない顔が並んでいるのを見ると、これから自分も友人の奥様として振る舞わなければならないと意識した。

——後で新居に遊びに来られたときに、初めまして、なんて言ってはいけない。

そんなことを考えていた。

ふと、その中ほどの席の中から自分を刺す視線に気付いた。美紀がその視線の主を捜し、一人の人物を見つけて愕然とした。周りの人はアルコールが回って赤い顔をしているのに彼だけが青白い顔をしていた。

——中野裕二に似ている。

中野祐二は美紀が以前付き合っていた男だった。

美紀が一郎と付き合うために裕二の気持ちも考えることなく強引に別れたのだった。その後、彼は踏切事故で死亡してしまった。あのときは自殺だったのかと真剣に悩んだが、その後の警察の調査では単純な事故……自転車が線路の轍《わだち》に嵌り脱出が遅れてはねられた……の様だった。裕二とは一時期、親密になったことがあり彼の両親にも一度会っていた。裕二は別れたことを両親に話していなかったらしく、彼の葬式に美紀が出席しなかったことを後で激しく叱責された。美紀もそれ以来、彼の家には近寄ったこともなかったの、その後どうなったのか知らなかった。しかし、彼が死んだのは確実だった。警察の検死報告書も見たし、新聞にも小さく載ったのだ。

すると、この席にいるあの男は何者だろうと考え出した。他人のそら似にしては、夕チの悪い冗談が過ぎるし、第一、どうして美紀の結婚式にまで出てくるのか理解できなかった。

「ねえ、一郎さん。あのテーブルの人ってお友達よね」

「あのテーブルってどこだよ」

「えっと、ほら、左から二列目で前から三番目のテーブルで一人だけ青白い顔の人」

「何を言ってるんだ。みんな赤い顔じゃないか。……皆、大学の友達だよ」

美紀には、皆赤い顔には見えなかった。どうしても彼一人浮いているし、他の人と喋っている風にも見えない。美紀は自分の友達にこの披露宴の座席表を見せてもらおうと思った。作成には美紀も一郎と話し合っていて決めているが、その時は名前と関係しかわからなかった、もし、その不審な男が中野裕二なら座席表に載っているはずだった。

そう思って友人が来るのを待っていると、今度は誰も近寄ってこなかった。さっきまで、食事も出来ないくらい、挨拶や写真を撮りに周りによってきていたのだ。

「一郎さん、ねえ」

美紀が一郎に助けを求めたが、一郎はやってきた友人相手に話し込んでいて、美紀の方を振り向かなかった。心配になりあの男のいる方を見ると、相変わらず鋭い視線で美紀を凝視している。どうして、周りの人みたいに楽しそうにお喋りに興じないのか、完全に浮いていて、しかも、そのことを誰も気にしないのが不思議であった。

ひょっとして、誰も彼の存在に気付いていないのかも知れない、と、そんな思いに駆られた。

「おい、どうしたんだ」

一郎が美紀の肩をつついた。ぼうっとしていたのではない、あの男の青白い顔がすうっと、宙に浮かび美紀の方に近づいてきた……様に見えたのだ。

男は一郎の席の前に滑るように近づいてきた。

「武内君、このたびはおめでとう」

一郎に挨拶した。一郎は平然と彼と話をしていた。そして、一郎は美紀を紹介したが、腰が抜けて立ち上がれなかった。

「おい、何をしているんだ」

「いや、いいですよ。女性は衣装が大変ですからね」

青白い顔のまま、紳士的な態度を取った。美紀はつばを飲み込んだ。
「美紀、紹介するよ、大学の友人で中野裕一君だ。テニス部でも一緒だった」
「中野です、初めまして」

彼は、「初めまして」に力を入れて、にやっと笑みをこぼした。美紀は恐怖におのきながら彼の顔を見つめた。鼻の高さやほくろの位置など、裕二と全く同じだった。例え双子でも間違えることはないはずだ。美紀と裕二は浅い関係ではなく、お互いの肉体を知り尽くしている仲でもあったのだ。だから、夫の前に彼が現れるだけでも気まずいことの上なかった。

——それに、中野裕一なんて一字違い？
ふざけているにもほどがあると思った。しかし、どう見ても別人ではない。
「あ、あの、失礼ですがご兄弟はおありですか？」
「ええ、双子の弟がいました。事故で亡くなりましたが……ああ、結婚式でこんなこと言ってしまってすみません」

裕二が双子とは聞いたことがなかった。年の離れた兄がいて地方で就職していたはずだった。だが、双子でもない限り目の前に起こっていることの説明がつかなかった。事故で死んだなんて、あからさまな嫌がらせのように思えた。
「おい、美紀、変なこと聞くんじゃない」
「ごめんなさい」

裕一と名乗った男は、一郎にビールを注いで、また、自分の席に戻っていった。
「一郎さん、中野さんて昔から知っているの」
「変なこと言うなよ。大学一年の時から友人だよ」
「それは、そうだけど……本当に双子の弟がいたの」
「それは知らないよ。大学に入ってからのは知っているけど小さいときのことは知らない」

美紀はうつむいた。本当に中野祐二は事故で死んだのだろうか、誰か他の人の死体を間違えてしまって、本人はひょっとして生きていてここに現れたのかも知れないと、勘ぐり始めた。

友人のカラオケが二組予定に入っていた。司会者に紹介され、美紀の友達である会社の同僚が二人で、流行のお祝いソングをデュエットで歌ってくれた。
「流石に可愛い女性はいいですね」

一郎のグラスにビールを注ぎに来た後輩社員はそう言った。確かに彼女たちの衣装も花嫁より綺麗なドレスだった。二十代にしか着ておくことが出来ないが、何も、花嫁より目立つことないじゃないと、美紀は少し不満げだった。

歌が一曲終わると、祝電の紹介の時間だがあの男が青白い顔のまま強引にマイクを奪い取った。そして、勝手にぼんぼんとボタン操作をして、変な曲をかけ出した。

以前、裕二と美紀が、男女の仲だったときに、雨の日に遊びに行ったのがカラオケだった。二人でいちゃいちゃしながら勝手に掛かってくる音楽に歌詞を適当につけて好きなように歌っていたのだ。美紀が別れを告げた前の晩、やはり、カラオケに行った。裕二はいつもと同じじゃつまらないからと、一番人気のないデュエット曲を選び自分でメロディーと歌詞をつけて自己流に歌ったのだ。それが、美紀が覚えている最後の裕二の楽しそうな姿だった。

その歌を、今から歌おうとしているのだ。

美紀は固唾をのんだ。さっきの出来事は裕二と裕一が双子の兄弟だったと思いこむことで自分を納得させた。しかし、この出鱈目な曲と歌詞は裕二と美紀しか知らないことだった。

双子説は消え去った。この曲の歌い方を知っていると言うことは、どう考えても目の前にいる中野裕一が本物の美紀の前の彼氏であることを否定する材料がなかった。しかし、認めるわけにも断じていかない。それ以上に裕二ならば、美紀を前にして他人行儀な態度を取っているのも不自然だったし、夫の一郎も、彼、裕一のことを昔からの友人と思いきんでいる。

彼の飛び入りで、カラオケは一気に白けてしまい、司会のお姉さんも困惑していた。「では、ここで、新郎新婦の過去を知る、大学時代の友人から挨拶を頂くことになっております」

打ち合わせでは、一郎のテニス部の友人一名、美紀の女子大時代の友人一名が挨拶することになっていた。

こちらはまともな人で、冗談を交えながら一郎の学生時代のエピソードや失敗談などを面白おかしく紹介した。

美紀の友人は自分が何人もの男と付き合っていたことをある程度知っている。それで、余計なことをいいやしないかと、内心冷や冷やしながら話を聞いていて冗談を言われても笑う気にもなれなかった。「結婚するまで処女」なんて言う人をあのときは彼氏も出来ない人の戯言と半分馬鹿にしていたが、今になってみると美紀自身それを守っておけば良かったと真剣に悩んだのだ。

こうして披露宴も終盤に差し掛かり、美紀はもう一秒でも早く終わってくれと願っていたが、最後にお互いの両親に花束贈呈の茶番劇が待っていた。と、言うのも美紀の両親は、遊び人の娘がいい人を見つけてきたと喜んでいて、この度結婚して片付くことにも大歓迎の意を表していたのに対し、一郎の両親は、悪い女に引っ掛かったと頭から決めつけているようだった。別に悪い女と言っても、確かに一郎を誘惑はしたが最初に彼

女を抱いたのは一郎からだ。美紀がそう考えている限り、相手の両親に受け容れられるまでこの先何十年掛かるか分からない状況だった。

しかし、この場は、美紀は精一杯の笑顔で一郎の母親に花束を渡してにっこり微笑んだが、母親はぶすっとした表情だった。美紀の母親は問題のある娘が片付いたことですっきりした笑顔で一郎からの花束を受け取っていた。美紀はこういうシチュエーションに不満感をあらわにしたが、一郎に脇腹をつつかれて、おしとやかにしていた。

美紀にとっては非常に長く感じた二時間あまりの披露宴だったがやっと解放される時間に近づきつつあった。後は出口で皆の挨拶を受けて送り出したら終わりだった。

会場から出てくるお客さん全員にバラの花を一本ずつ、手渡していた美紀だったが、あの男が来たときには流石にぞっとした。中野祐二には間違いないのだが、向こうは美紀のことを知らない振りをしている。その割に美紀と裕二しか知らないことを持ち出しでは、美紀を恐怖に陥れて楽しんでいたように見えた。だが、本物の様にも見えてその実、双子か、他人のそら似であって欲しいとは心の中で望んでいたが、実物とカラオケでの奇妙な曲を勘案するとどうしても本人以外にあり得ない。しかし本人はすでに死んでいるはずなのだ。

美紀にとっては悪い冗談以外の何者でもなかった。

最初に中野祐二と出会ったのは美紀が女子大を出て就職して二年目の二十三歳の時だった。職場の女子社員二名とオシャレな居酒屋を見つけたと、一緒に出掛けてお酒を飲んで大いに盛り上がっていた。騒いでいるうちに、うるさいなと思われたのか隣のグループに文句を言われたのだが、向こうは男ばかり三人で丁度人数も合うので一緒に飲まないかと誘われてそれにのったのだ。その男の中に裕二がいた。喋ると面白かったし、女の子に優しくかった。それで帰り際にメールアドレスの交換をしたのだ。

それから、個人的に美紀は裕二とつきあい始めた。裕二は都内の事務用品を扱う会社にて普段は会社のバンに乗って走り回っていたので、美紀の会社の近くに寄ったときには一緒にお昼を食べたりしていたが、すぐに深い関係になってしまった。

美紀自身、彼と結婚してもいいかなと思ってはいたが、五年間結婚しなかったのは、結局決め手がなかったのだと思っている。付き合っていて楽しい以外に、特筆すべき点がないのだ。

美紀がそう思って、裕二と付き合っている最中にも他の男と遊んでいたりしていたのに対し、裕二は真剣に結婚を考えていたようだった。それで、美紀を両親に引き合わせたりなど、色々画策はしていた。

しかし、美紀は最終的に武内一郎を選んだ。結局はステータスで選んでしまったというのが正直なところだった。社内では幹部候補であるし、高給取りだし、頭もいいし、スポーツも得意だ。結婚して社宅に引っ越し、専業主婦になるのも悪くないしこのまま仕事を続けるのもいいと思っていた。

今から思うと非常に身勝手ではあったが、最後に裕二と会ってホテルに行き情事にふけた後、美紀から別れ話を切り出したのだが、裕二は猛反発した。

「どういことだよ」

「ごめんなさい、裕二君のこと嫌いな訳じゃないんだけど.....束縛されたくないって言うか」

「じゃあ、束縛なんてしないよ。これまで通りでいいじゃないか」

「ごめんなさい」

「他に男でも出来たのかよ」

美紀ははっきり言うべきかなと思ったが、言わなかった。その代わりにうつむいて涙を流して見せた。こういうところだけ計算高かった。

「もういいよ、好きにしたらいい。でも、また会えるんだろ」

美紀は首を横に振った。

「外国にでも行くのか」

美紀はうなだれた。

「もういいよ、それすら教えてくれないんだな.....もう、今日は帰ろう」

裕二は背中を向けたままさっさと服を着て帰る準備をした。美紀も急いで服を着てホテルを出た。タクシーを二台つかまえてそれぞれが違う方向に帰って行った。それが、最後のお別れになってしまった。

美紀自身、気に入らない男と別れるのは初めてのことでない、女子大時代を含めて何人も、ひどいときには同時に複数の男性と付き合っていたこともあった。しかし、このときはいつもと変わっていた。

最後に別れてから三日後、裕二が死んだのだった。

第一報は、裕二の母親から美紀の携帯電話にかかってきた。最初は電車で飛び込んだという風な雰囲気だったが、事故が新聞に載り、警察の調査が入り、最終的には自転車の車輪が挟まって脱出が遅れたと言う単純事故で決着したのだ。

裕二の死は美紀の心にもダメージを与えた。自分勝手に振ったばかりに自殺に追い込んだのではないかという、良心の呵責に苛まれたのだ。その上、裕二が両親に別れたことを告げていなかったらしく、婚約者のくせに葬式にも来ないと叱責されてしまった。美紀もさすがに、もう別れてしまったんですよ、というようなことは言えず黙ってしまった。しかし、それ以来、裕二の家にも近づかなくなってしまった。

それから半年が過ぎていた。

披露宴が終わった後、控え室でぼうっとしていた美紀に、仲のよかった従姉妹が呼びに来た。

「美紀姉ちゃん、一郎さんがロビーで待ってるよ。友達だけで二次会をするんでしょ」

「そうだったっけ」

「もう、しっかりしてよ。奥様としての最初の仕事でしょ」

「友達ねえ。行きたくないわ」

「そのせりふは、わたしじゃなくて旦那様に言いなさいよ」

「朋《とも》ちゃん、代わりに言ってきてよ」

「冗談でしょう。わたしの結婚式じゃないもの」

「じゃあ、朋ちゃんも、ついてきてくれないかな」

「だってお友達ばかりなんでしょ。わたしが行っても浮いちゃうよ」

「でも、お願い。危なそうな人がいるの」

「そんなの、旦那様に守ってもらいなさいよ」

そう言われて美紀は渋々、立ち上がった。ドレスから普通の明るめのスーツに着替えてロビーに行くと、一郎は友人達と盛り上がっていたし、美紀の友人は別のかたまりになっていた。

「おう、遅かったな」

「ごめんなさい」

「店は、予約を入れてある。もうすぐタクシーが来るからな」

「うん」

一郎の友人達の中に、中野裕一もちゃんと入っていた。大学の同級生でテニス部でも一緒だったと言われれば参加しない方が不自然だが、美紀にとっては、苦痛に感じていた。あの世から裕二が呪っているとしか思えなかった。

タクシーが三台到着し、一郎は男性の友人と乗り込み、二台目に女性が乗り込んだので残った車両には美紀と裕一、そして美紀の友人が乗り込んだ。後部座席で裕一と隣り合わせになった美紀は、下を向いて一分一秒でも早く目的地に着いてくれと祈っていた。もし、美紀の友人が乗り合わせていなかったら、この場から逃げ出していたかも知れない。裕一はそんな美紀の動揺を見透かしたかのように、いたぶった。

「武内さん」

そう呼ばれても美紀は返事を出来なかった。今日から旧姓小川から武内に変わるのだが、返事できないくらいに動揺が激しかった。

「それとも、小川美紀さんと呼んだ方がいいのかな」

「え、いや、武内で結構です」

「大分、披露宴でお疲れのようですが、本当に疲労宴ですね、はは」

彼はそんなつまらないオヤジギャグを言った。誰もふっとも笑わない。

「あの、失礼ですが、今日はどうして二次会まで出席されるんですか」

美紀がつかみかかるみたいな感じで質問すると、前の席にいた、友人がその言い方を咎めた。

「ちょっと、美紀ちゃん。それ失礼だよ」

「いや、いいんですよ。武内君とは大学の四年間ずっと一緒でした。テニス部でも一緒に試合に出た仲です。やはり、お祝いしたいじゃないですか」

「そ、それも、そうですね。失礼しました」

「他に何かありますか」

裕一は美紀の耳元に口を近づけてそう言った。確かめたいことは一杯あったが、すでに泣きそうな顔になっている。

「披露宴のカラオケで変な歌をうたったじゃないですか？ あれは何の真似ですか」

「変な歌ですって？ 武内さんもご存じの歌じゃないんですか」

「えーっ！ 美紀、知ってたの？」

「し、知らないわよ」

——嘘を言っても駄目ですよ。

裕一は美紀の耳元でささやいた。

やはり、裕一は裕二だと美紀は確信を持った。振られたことを根に持ってこうして復讐に現れたのに違いない。しかし、彼が裕二だとすると踏切ではねられたのは誰か別の人と言うことにしないと話が通じないが、警察の検死報告書も見ている以上、それもあり得なかった。残るは幽霊と言う可能性しか考えられない。

「どうしたんですか、武内さん。幽霊でも見たような顔をして」

美紀はもう声も出なかった。背筋がぞくぞくとし、顔から血の気が引いていた。

意識が戻ったのは、二次会の店の前だった。タクシーが止まり前の席の友人が起こしてくれたのだった。——美紀ちゃん。と言う声で我に返った。横を見ると相変わらず、裕一は青白い顔をして横に座っている。しばらくぼうっとして座っていると、一郎が心配そうな顔で様子を見に来た。

「おい、大丈夫か」

「あ、うん。ちょっと疲れただけ」

心配そうなタクシー運転手の顔が目に入ったが、美紀は一郎に肩を担がれて車から降りた。

「どうも、ご迷惑をお掛けしました」

店の前には美紀と一郎を含めて男女八名が揃っていた。一郎が予約していたのはこのビルの三階にあるワインバーだった。エレベーターが来るのを待って一斉に乗り込んだ。

店内に入り、一郎が名前を告げると、奥の大きめの部屋に案内された。美紀も後について行った。この店は、カウンターが主で、個室は一つだけだった。

個室にはテーブルが二つあったが、一つにまとめようと一郎が言い出して、少し移動させ男女が適当に混ざるように椅子をおいて腰掛けた。

何となく陰気な部屋だった。美紀は二次会が終わったらととと、新居に帰ろうと思っていたが、美紀の友人達も酒飲みばかりだったから、うまく帰れるかどうか心配だった。

一郎が、メニューを見て、乾杯用のシャンパンと、最初に場を持たせるためのワイン二本とおつまみ類を頼んだ。シャンパンが来るまで、皆勝手にお喋りしていた。

「ところで武内。いつ、プロポーズしたんだ？」

結婚式ではお決まりの質問だった。

「忘れたよ」

とぼけるのもお決まりだ。女性の友人につつかれて、美紀が代わりに答えた。

「今年の初めくらいだったかな。てへ」

可愛らしくかわしたが、実際には初めて関係を結んだ後に美紀が恐喝同然にプロポーズさせたのだ。

——ふふ。

テーブルの隅で裕一が冷めた笑いを浮かべた。美紀はぞっとした、踏切事故とも、ほぼ時期を同じくしていたのだ。

「何だよ、中野。変な笑い方して」

一郎が咎めた。

「いや、別に」

とにかく陰気な場所だった。険悪な雰囲気になりつつあったところに店員がシャンパンとグラスを持ってきた。

一郎はほっとした表情で、店員にグラスに注ぐように頼んだ。店員は慣れた手つきでシールを剥がし、コルク抜きで途中まで抜いてから一郎に尋ねた。

「最後はお開けになりますか？」

「いや、そのまま注いでください」

「かしこまりました」

店員は、しゅぽっとコルクを抜いて、右手でボトルの底を持ち、テーブルの各自の前に置いたシャンパングラスに注いでいった。やや、黄色みがかった液体の底から炭酸の泡が立ち上った。

「えー、本日、わたくし武内一郎と美紀の為に忙しい中、結婚式にご出席下さいまして誠にありがとうございます」

そう言って一礼した。美紀も一緒に立ち同じように一礼し、一郎の乾杯の合図で皆がグラスを目の高さに上げた。

「かんぱーい！」

美紀が一気に飲み干すと、あまり食べてないところにいきなり炭酸とアルコールを入れたせいか、胃痛とめまいがした。皆が座るのをいいことに、自分もそのまま座り込んでしまった。

座って視線を上げると、やはり、裕一の刺すような視線が気になってしょうがない。彼の視線の向け先は、じっと、観察すると美紀の目に向かっていった。何か意味があるのだろうか、それも、気になった。

追加のワインと、料理が運び込まれてくると、一郎が美紀の方を見て、気を利かせて配れよ、と言う合図をした。大皿に入ったソーセージや野菜スティックを適当に小皿に

取り分けて二人に一つくらいの割合で回していったが、裕一の前に置こうとして手元に視線を感じ、思わず皿をテーブルの上に落としてしまった。十センチくらいの高さだったので、音だけは激しかったが皿は割れなかった。

「おい美紀。何をあわてているんだ」

「ごめんなさい。どうしちゃったんだろ」

美紀が上目で裕一の顔色を確かめると、テーブルの上に散らばったソーセージを見て冷たい笑みを浮かべていた。おもわずぞっとして左手に取った皿がかたかたと揺れた。そんな美紀の動揺を察したのか、隣にいた友人が助けを出した。

「どうしたのよ。疲れが出たのかな。座ってなさい。わたしがやるから」

「ごめんね」

美紀はしゅんとなり、椅子に腰を落とし両手を膝の上に置いてじっとしていた。

途中、トイレに中座しようとして一郎は部屋を出たところで美紀を手招きした。

「美紀、何か心配事でもあるのか？」

「え、あ、ううん……でも、あの人。中野さんて一体何している人なの？」

「まだ何か疑っているのかい。普通のサラリーマンだ。だけど、一体どうしたと言うんだ。今まで友人を紹介したのは初めてではないだろう」

「それは、そうなんだけど。あの人だけは別なの。目が怖いわ」

「子供みたいなこと言うなよ」

そう言われても、美紀には中野裕一は裕二の亡霊だった。過去に関係を持った男が夫の前に現れるのも、ある意味気まずい話だし、死んだはずの人間が目の前に現れたのだ。更に、どちらも夫に相談できる話ではない。誰かに頼りたい気持ちだったが、その言葉を飲み込んでしまった。

「ごめんなさい。ちゃんとするわ」

「いいけど、疲れたんじゃないか。顔を見てみろ」

「え？」

一郎にそう言われて、美紀は女子トイレの洗面所で鏡を見た。額には脂汗が浮かんでいた。顔色も裕一に負けじと青白くなっていた。——どうなっているの。と、鏡の中にいる自分に問いかけたがその瞬間、美紀の肩に青白い裕二の顔が浮かんだ……様に見えた。

——ひえ。

ばたん、と美紀はその場に倒れ込んでしまった。

2.

2.

再び目が覚めたのは、近くの病院の救急病棟のベッド上でだった。ベッドの横には、ネクタイを外した一郎が付き添っていた。スラックスは二次会の際のままだったから、ずっと側にいてくれたんだと、美紀は感づいた。少しだけの嬉しさと後ろめたさが入り交じった気分だった。

「気が付いたのか」

そう言って、割合と冷静にナースコールを押して看護師を呼び出した。

「あの。一郎さん。ごめんなさい」

「いいんだよ。疲れていたんだろう。前の日に独身最後の夜だなんて友達とはしゃぎ回るからだ。これに懲りろよ」

「うん。でも、今日の七時に飛行機に乗るんじゃないっけ？」

新婚旅行はアメリカ西海岸。式の翌日に成田空港からロスアンゼルス行きに乗る予定だった。

「馬鹿！ 退院許可もないのに飛行機に乗れるもんか。もう間に合わないからキャンセルしたぞ」

「うそー。じゃあ延期なの？」

「馬鹿！ 長期休暇が取れるなんて結婚式と親の葬式だけだ。もうあると思うなよ」

二度も馬鹿と言われた上に、新婚旅行もなくなってしまい気分は真っ暗になった。もともと学生時代から海外など何度も行ったことがあったが、結婚してしまうともう行けなくなると思っていたのだった。

「でも、どうしてあそこで倒れたんだよ。わざわざ女子トイレなんか。俺たち入れなかったじゃないか」

「ごめんなさい。でも、あそこ何か陰気で、それに幽霊が出たような気がするの」

「馬鹿なこと言うんじゃない。陰気になったのはお前が青い顔して座っていたからだ。あそこは会社の若い奴らとよく使っているんだ。幽霊なんか出るもんか」

ご会話中恐れ入りますと、言いながら看護師が入ってきて、美紀のブドウ糖の点滴を確かめながら聴診器を胸に当て、体温を測りながら、同時に脈を取った。

彼女は、計測した数字を記録用紙に書き込み、それをボードに挟んだ。

「あの、どこか悪いのでしょうか？」

「いえ、単なる貧血で意識がもうろうとなったという診断でした。この後、先生に診てもらって異常がなければ、退院可能と思います」

「そうですか」

後から主治医も来たが、看護師と同じことをしていた。

「異常はないようだね。もともと、倒れることは多かったですか」

「いいえ、昨日が初めてです」

「そうかい？ 単なる貧血でなければ他の病気を疑わなければならない」

「いえ、こんなことはよくありました」

前言を翻して言い逃れ、美紀は強引に退院しようとした。しかし、主治医は万が一のことがあったらいけない……血液を作る骨髄や循環器系疾患の可能性もあると脅かして検査入院させてしまい、一週間、胃カメラを飲んだり、CT写真を撮られたり、MRI診断装置に載せられたりしていた。検査結果は特に異常はなく何とか無事に退院させてもらい、一郎の待っている社宅に帰ると、まだ、結婚前に荷物を運び込み散らかっていた部屋の片付けが終わっていなかった。

一郎は結婚一ヶ月前に独身寮から社宅に移っていたが、あいにくと仕事が忙しく、梱包を解く暇もなかったし、美紀は自宅通勤でここにも入り浸っていたが生来片付けの嫌いな性格だった。結婚式と新婚旅行のために取れた長期休暇だったが、美紀が入院してしまったために、一郎も半日付き添っていたし、部屋の片付けには手が付いていなかった。

美紀が退院してから早速、掃除と片付けに掛かり、一郎も整理整頓を始めるとあっという間に部屋は片付いた。

「ごめんね、何も手伝えなくて」

「いいよ、入院していたんだから。それから、一週間の休みがこれで終わってしまう。お前は休み明けから、新宿営業所でやって行けそうか？」

慣例により職場結婚するとどちらかが転勤になることになっていたのも、この場合、美紀が新宿営業所に移ることになっていた。結婚式前に辞令をもらい、独身最後の夜を同僚の女性社員達にお祝いを兼ねて送別会もしてもらったのだった。営業所は本社と比べると、少人数で人間関係も親密と言えたが昨今の厳しい経営状況では、穏やかなところと険悪なところに二極化していた。

「大丈夫よ。でも、営業所が厳しかったら専業主婦になってもいい？」

「構わんよ。そのときは子供が欲しいんだけど。いいの」

美紀は男性経験は豊富だったが、自分が子供を産むなどと言うことは予想だにしていなかった。確かにこれまで付き合った男には避妊はしてもらっていたが、夫にいいよと言ってしまえば今日から避妊なしの夫婦生活が始まる可能性があった。そう言うことに對し、理解は出来ても心の中には漠然とした不安があった。

「子供は賛成よ。でも、わたしが会社を辞めるまで待って欲しいの」

「そうか。わかった」

美紀の消極的な態度に一郎は不満げだったが、そのうち気が変わるだろうと鷹揚に構

えていた。社宅の他の奥さん連中と付き合ううちに子供にも免疫が出来る。大抵はそういう風になっていると言いたげだった。

美紀自身どうして妊娠することに拒絶反応を感じるのか理解していない。快樂だけの性交渉に慣れすぎて本来の意義など忘れ去っていたのかもしれない。しかし、それを認めてしまうことも恐ろしかった。

そんなことを言われていたため、結婚後、初めての夜をむかえ、美紀は極度に緊張した態度で一郎と接した。

「おいおい、まるで処女みたいじゃないか。どうしたんだよ」

「そんな言い方しないでよ。恋人と夫とじゃ立場も何もかも異なるもの」

「ふうん。そんなもの？」

一郎は美紀が遊び人だったことは知っている。そんなことを承知の上で彼女と結婚したのだ。今更、何を言うのかという顔で美紀の相手になっている。

夜中まで堅くなったままで夫の相手をして美紀は眠りに落ちた。結婚前に抱いていた幻想とは何もかも違っていた。

翌朝、六時に目覚まし時計のアラームが鳴り、美紀は寢床から起きだした。今日から新しい生活と、職場が待っていた。今までのように時間ギリギリまで眠り、母親に起こしてもらうことは出来なくなった。自分で起きて、自分のことはもちろん夫の世話までしなくてはならない。その上、子供まで作るなんて真っ平ゴメンであった。

一郎はその点では手の掛からない夫であった。地方出身で学生時代から一人暮らしが長く、会社でも独身寮にいてほとんどのことは自分でしていたので、美紀が不器用な手つきで何かしようとしても、いいから、と言って自分でしてしまった。

美紀は一郎に手伝ってもらって朝食のゆで卵とトースト、コーヒーを作った。

「割と家庭的なんだな」

一郎は消極的に美紀をほめたが、美紀には嫌味に聞こえた。

「割とってどういう意味よ」

「別に。そのままだよ」

そのまま黙ってしまったが、一郎は特に気分を害する風でもなかった。

七時になり美紀は一郎と同時に社宅を出て駅まで歩いた。今日から行き先は変わってしまったが途中までは同じ電車だ。

美紀が一郎と別れて新宿駅に着いたのは八時前だった。少し早めの出勤だったが、初めての職場だから、上司より遅くなるのも格好がつかないと思ったのだ。場所自体は前から知っていたので、迷わずビルにたどり着き営業所事務室の入り口で待っていた。

営業所長は八時半にやってきた。

「あの。た、武内美紀です。本社営業部から転勤になりました」

姓が小川から武内変わったので、少しつかえてしまった。

「聞いてますよ。結婚してこちらに配置されたのですね。こちらにも女性社員が四人いま

す。仲良くやってね」

「はい。よろしくお願いします！」

所長は全員……所長を含めて八人だった……を集めて、朝礼と美紀の紹介を行った。美紀は緊張しながら自己紹介したが、割合と和気あいあいとした事務所の様に感じてほっとした。仕事はしばらくは庶務で、慣れたら営業アシスタントにつくよう言われ、若い女子社員の隣の席をあてがわれた。

「よろしく、緑山かなえです」

快活そうな言葉遣いで、彼女はそう挨拶した。美紀もよろしくとお辞儀をして席に着いた。

「ちょっと」

緑山はそう言って美紀をロッカーの陰に呼んだ。

「何でしょう」

「えっとですね、これで女子社員が五名になるんですよ」

「そうですね」

緑山の話では、二人が未婚、三人が既婚者だと説明した。しかも、未婚は美紀より年上で、既婚者は美紀より年下らしかった。

「だから、あの人達の前ではあまり新婚風を吹かせない方がいいですよ。一応、知っておいた方がいいと思って」

親切な忠告だった。お局様を敵に回すと会社生活は地獄になる。さらに、そのうちの一名は婚約破棄された肩書きを持つので美紀はあまり近寄らない方がいいと教えてくれた。その日の午前は、事務用品のしまっている場所や書類・用紙の保管場所、ファイルの種類と順番などを教えてくれた。

正午前になり、彼女は美紀を昼食に誘った。

「近くに定食屋さんがあるんですけど、十二時を過ぎると混むんです」

「ありがとう。親切なんですね」

「いいえ」

確かに有り難いお誘いだった。自分で弁当を作ればいいのだが、それをしないからには安くて美味しい店を探すのが、楽しい会社生活を送る必要条件なのだ。彼女が案内したのは、営業所からすぐのビルの一階にあった。メニューは色々あったが、日替わり定食が量も適当で美味しいと教えてくれた。

「本当に美味しい」

それが礼儀だと思って、美紀はそう言った。彼女は嬉しそうににっこり笑った。

「そうでしょ」

「緑山さん……」

「あ、かなえでいいですよ。わたしの方が年下だし」

「じゃあ、かなえさん。わたしも美紀と呼んでね」

「はい。わたしはですね、二十四歳のときに結婚して今は二十六なんですけど、主人の実家にいるんですよ」

「あら、大変そうね。わたしは社宅で二人だけだから」

「いいな」

「やっぱり、嫁と姑の確執ってあるの」

「表面的にはないですよ。お義母さんも優しいし。でも、やっぱり他人だと思えることはありますよ」

「それはどんな？」

「味噌汁の味付けが、実家の母のと違うとか、洗濯物のたたみ方が違うとか、小さなことなんです。まあ、でも、こんなことあそこでは言えなかったから」

「ここの仕事は大変なの？」

「ううん。新宿営業所は法人向けだから、決まった相手としか取引ないし、今のスタッフだけでも多いんじゃないかとみんな言ってます。そのうち、既婚者が辞めるのを期待しているみたいだけど、わたしは辞めたら一日中家の中にいなければならないし、姑の相手をするのも嫌だし」

「ここの人間関係はどうなの」

「比較的業務に余裕があるので、八名のスタッフはあまり気味です。赤字じゃないので人員削減対象になったことはありませんが、今のところ要注意人物二名以外は、人間関係は良好です」

「そうなんだ」

美紀は、何となくこの営業所で楽しくやって行けそうな気がした。

3.

3.

三時頃、事務用品の営業マンが、注文しておいたコピー用紙やトナー、プリンタのインクなどの文房具が入った箱を配達に来た。

「美紀さん。検品お願いします」と、かなえは言った。

「はい」

検品は、納入された品物を伝票と種類と数量が合っているか照合する作業だ。注文通りであると確認すれば、受け取りに検収印を押すだけのことだ。後で、慣れない事務用品入れに整理して収めるのが面倒なくらいだ。

「ご苦労様です」

美紀はそう言って、事務用品会社の営業マンに挨拶した。

しかし、彼の顔を見た途端、美紀の顔から血の気が引いて、手に持っていた検収印のスタンプを地面に落としてしまった。からからと、本体から折れた柄が、大きな音を立てて足元に転がった。

「美紀さん、どうしたの！」

かなえが叫んだ。

「ごめんなさい。スタンプを落として壊してしまったの」

「あれあれ、買ったばかりだから怒られるよ。でも、古いのがあるからごまかしておいてあげる。これ使って」

かなえはそう言って、ゴムの部分が少し擦り切れたスタンプを出し、新しいバラバラになったスタンプを引き出しの奥に隠した。

男は中野裕一だった。相変わらず青白い顔で、美紀に対しては冷たい笑いを浮かべている。会社の制服を着ていたが、彼に間違いなかった。

「あの……」

「その節はどうも。いい式でしたね」

美紀はまだこの男がつきまとい、すっとぼけて別人を装い、美紀を精神的に追い詰める気だと悟った。

「毎度ありがとうございます。またのご利用をお待ちしています」

そう言って、帰ろうとする裕一の後ろから美紀が走って追いついた。……今日はつけ回されることに対する大文句を言おうと思ったのだ。

「あ、あの！」

「何か？」

裕一が振り向いた瞬間、美紀は声が出なくなった。

「忙しいんですけどね」

「すっとぼけないで！ 散々あたしをなぶり者にしておいてこのまま済ませられると思ってるの？」

「恐喝ですかね」

裕一は事務用品の配達途中らしく、忙しいのは本当のようだった。

美紀は結婚式以来、恐れていた裕二、いや、幽霊の正体に一気に迫る気でいた。

「あなた、裕二でしょ？ 間違いないわ」

「裕二ではなく裕一です。何をそんなに興奮しているんです」

「とぼけないで！」

「興奮しないでください。ここでは何ですからどこかで、甘いものでも召し上がりますか」

「ケーキなんかでごまかされません。結婚式のときもずっと、わたしのこと睨んでいたし、今日もこうして現れて……。まだ恨んでいるんですか」

「ちょっと、失礼じゃないですか？ わたしがこの営業所に事務用品を届けるのは業務上のことで三年も前から担当なんです。後から来たのは美紀さんの方ですよ」

本当かどうか解らなかったが、確かに正論だった。

「ごめんなさい。でも、あなた本当に裕二ではないんですね」

「違いますよ。そんなに気になるんだったら、その裕二さんに確かめれば電話一本で済むことでしょう」

「もう、いないんです」

「いない？ どこか海外にでも引っ越したんですか」

「いいえ。わたしに振られたあと、自殺したんだと思うんです。踏切に飛び込んだんです」

「ほお、これはすごい話を伺いました」

美紀は裕一をじろりとにらんだ。この男がとぼけているのか、本気で言っているのか未だに区別がつかなかった。

裕一は美紀をビルの階段横の目立たない場所に連れて行き、そこで意外なことを話した。

「わたしも忙しいので、失礼な内容ですが手短かに話します。あなたは過去、大勢の男とつきあい、そのうちの一人が事故で亡くなっていますね」

美紀は、やはりそうだったのかと顔色が変わった。裕一は続けた。

「付き合ったことのある男と偶然風貌が似ているわたしに出会い、心の負い目があることから美紀さんは疑心暗鬼に陥り、わたしをその亡霊と思いこみ、自縄自縛に陥った。違いますか」

違います、と、言いたかったが否定はできなかった。

「ですが、その裕二さんと言う男が、本当にあなたに振られたために自殺したと思っているのですか？ だとしたら自意識過剰もいいところですよ」

「何ですって」

「あなたに振られて自殺するような男などいない。考えても見なさい。あなたのどこに魅力があると言うんです？ 最初、武内から結婚式の案内が届いたとき、相手を妊娠させてやむを得ず結婚することにしたのかと思ったくらいです。彼の好みは、知的で優しい女

性です。なのに、実際に結婚したのは正反対だった。浅はかで自己中心的な女性だった」
「よく、それだけ言えますね……あたってのけど」

「武内がどうして美紀さんと結婚する気になったのか。それは、本人しか知りません。でも、顔か身体かくらしか思いつかないし、だとしたら、若いうちしか成り立たない関係でもあるのですよ」

「ちょっと待って下さい。じゃあ、年を取ったら捨てられると言うんですか？」

裕一は、しばらく考え込んだ。

「美紀さんが人を愛することの意味を理解していれば、今までの行動は取らなかつたらうし、これからも、武内との生活に問題が起こることはないでしょう」

一種の虎の巻だった。そんないい方法があるなら教えてもらいたい。

「それ、教えてもらえますか？」

「情報は無料ではありません。ですが、武内は大事な友人です。年を取ってからあなたが捨てられても自業自得ですが、武内の邪魔だけはしないで欲しい。それだけです」

「教えて！」

「あなたが今まで男性にちやほやされて何人もの男と付き合えたのは、顔と身体によるものです。当然これから急速に劣化します。武内の好みはあなたと正反対。結果言えるとは、あなたがこれから変化するようにして、知的で優しい女性に生まれ変わる。それが、結論です」

「そうすれば、主人の愛を独り占めできるんですか？」

「解っていないのはその点です。愛は相手から引き出す貯金ではなく、相手のことを幸せになってもらいたいという、無償の行為です。経験はありますか」

「そ、それは、その位思ってますが……でも、あるとは言えないですよ」

「では、これから実践して下さい」

それだけ言い残して裕一は去っていった。武内の友人として話した事柄のようだったが、美紀の個人的な性格の分析までなされていた。これで、やはり裕一は裕二だったのだという疑いが晴れることはなかった。

職場に戻るとかなえが咎めた。二、三十分近く席を空けていたのだ。

「ごめんなさい」

「まあ、いいんですけど。はんこ壊したでしょう？ 新しいのを入れたばかりだったのに。古いのでごまかしておきますけど、これ見付かったら怒られますよ」

「接着剤で直しておきます」

壊れたはんこは、よく見るとプラスチックの柄が取れただけだったので、接着剤で固めればつきそうだった。しかし、意外とつかないものだ。かなえは机の中から別の接着剤を取り出した。プラスチック専用だ。

「でも、一見くっついた様に見えるけど、力を入れると取れますよ」

「どうしよう？」

「古いのを置いておけばいいと思う。一年経てば新しいのが来るから、そのときに交換すればいいですよ」

「それでいいの？　ありがとう！」

ふと、裕一のことを思い出した。美紀のことを顔と身体以外に魅力がないと言い切っていた。顔は美紀も自分でちょっと可愛い方と自信を持っていたが、身体に関しては裕二でなければ知っているはずもなかった。それに、結婚式の当日会っただけであんなに細かい指摘が出来るはずがない。

「かなえさん。さっきの事務用品の人って前から同じ人なの？」

「多分そうだと思うけど、そんなに全部の顔と名前なんて覚えていませんよ」

「そう……」

「どうしたんですか？　深刻な顔して」

「ねえ、例えばご主人と街を歩いていて元の彼氏に出会ったらどうする？」

「えーっ、それは気まずいでしょう。でもわたしは主人が初めてだったから、そんな経験はないですけど」

かなえは、当然のように言った。美紀はそれ以上突っ込んだ質問は出来なかった。何となく気になり、事務用品の納品書を綴じたファイルを探し出して確かめたが、相手の営業担当者に「中野」という判子が押してあるだけだった。

——中野裕一の言っていることは本当だったのか？

「美紀さん、そんなことあったんですか？」

かなえの声に、驚いて振り向いた。

「ううん、そんなことあるわけじゃない。ははは」

笑ってごまかしたが、声が震えていたのは自分でも感じていた。

初日だったので、終業時間きっかりで帰宅の途についた。裕一のことを気になってしょうがなかった。夫の学生時代の友人と言うことで結婚式だけの辛抱かと思っていたら、勤め先でも顔を合わせる羽目になり、その上、ますますプレッシャーを掛けられているのだ。

——こんなことなら、あのとき、お葬式に顔を出していれば良かった。

そうすれば幽霊とか、ひょっとして、とか思わずにすんだのだ。今更、裕二の実家に押しかけて確かめるわけにもいかなかった。残るは中野裕一と接点のある夫に確かめるしかなかったが、親友の元彼女でしたなんて知られるわけにはいかない。

午後六時に社宅に帰った美紀は、一郎が残業で遅くなるのをいいことに、彼のアルバムやアドレス帳を調べた。一郎が大学を卒業してから十年近く経っているので、探してもすぐには見付からなかった。会社の社員旅行やスキー同好会など、数年前からのものしかない。

散々さがしてもわからなかった。もっとも一郎だって、引越し後の整理も追いついておらず、段ボールを開けて本棚や机に並べただけだった様で、彼に聞いてもすぐに出て

くるか疑問だった。時計の針が七時になり、テレビの画面がバラエティー番組になった。
「おっと、夕食の支度をしなくては……」

美紀はあわてて台所へ走った。扉の角に足の小指をぶつけて痛い思いをした。

冷蔵庫を開けても、まだ何にも入っていなかったが、少しの野菜を取り出してから少し悩んで、肉なしの肉じゃがを作ることにした。これからは、あらかじめ調べてスーパーに買い物に行かなければならないと思った。新婚一週間だが、ほとんど入院していたので、勘弁して貰えるだろうと信じていた。

お米を研いで炊飯器のスイッチを入れたところで、一郎が帰ってきた。

「ただいま。やっぱり、会社から帰って明かりがついているのはいいものだな」

結婚したのはそれだけの理由のようにも思えた。

「おかえりなさい。早かったのね。残業はいいの？」

「今日だけは、課長が気をつかってくれたみたいだ。明日からは遅くなると思う。昼休みに電話するよ」

「いいよ、ちゃんと待ってるから。気にしないで仕事して」

「うん」

「それから、ご飯まだなの……ビールにする？」

「ふむ、ビールしかないんだろ」

「えへ」

一郎が買い置きしておいた缶ビールとコップをお盆に載せて、一郎の前に置いた。一郎のコップに注いでから、美紀は思い出したように、風呂のスイッチを入れに行った。これは全自動で風呂を沸かしてくれる。もっとも帰宅したときにスイッチを入れておけば良かっただけの話だ。

少し遅めの夕食を食べてから、一郎は、今日の肉じゃがには肉が入っていなかったな、と言った。

「ごめんね。まだ、在庫調査とスーパーでの買い物が終わってないの」

「在庫調査なんていいよ、その日の安売り商品でいい。肉、魚については好き嫌いはないから任せるよ。それに家事が大変なら、いっそ、専業主婦になってもいいぞ」

「でも」

「何だよ。子供が欲しいと言ったことを気にしているのか？ ひょっとして子供が嫌いなのか」

「そんなことないよ」

実際のところ迷っていた。他人の子供を見ているうちは、ただ、暴れ回ったり、高い洋服の上によだれを垂らしたりと迷惑な存在でしかなかった幼児だったが、夫と子供だったらまた違うかなとも考えていた。

一郎が二本目のビールで少し赤くなったのを見て、ふと昼間の出来事を確かめてみる

気になった。

「あなた、大学でテニス部って言ってたじゃない？」

「何だよ急に。でもあの頃は若かったなあ。炎天下で全力疾走しても平気だったんだぜ。今だったらビール片手に応援にまわってるよね」

「そうなの。でも、その話じゃなくて、この間の結婚式に来ていた人のこと」

「ああ、あのときね。大学関係はゼミの友人とテニスと将棋部の奴らだ。将棋と言ってもその後の懇親会がメインだったけどな」

「ええと、二次会で気味が悪い人がいたじゃない？　中野なんとかって言う……」

「そういう言い方をするんじゃない。美紀が倒れた後で女性と一緒にトイレに入って、担ぎ出すのを手伝ってもらったんだ。少しは感謝しなさい」

担ぎ出されたのなら、やはり、身体を触られていたんだ。と思うとぞっとした。

「あの人が本当にテニス部員だったの？　勝手に紛れ込んでいたとかじゃないの」

「失礼なことを言う奴だ。同好会はだれでもOKだが、正規の部は原則として学生でなければ所属出来ない」

そう言って、一郎は机の下から段ボールを引っ張り出し、しばらく中をかき回した後、ガリ版刷りの……茶色く変色していた……名簿を取り出した。

「入部したときに一年生有志で作ったんだ。怪我をして入院でもしたら困るだろう」

そう言って、一枚一枚ページをめくり中野裕一が載っている箇所を示した。

そこには、経済学部一年、中野裕二と書いてあった。

美紀はぞっとした。

「どういうこと？」

「そんな、顔色を変えることもないだろう。きっとミスプリントだよ」

「でも、名前だよ。普通だったら間違えられたら、すぐ指摘するじゃない」

「でもなあ。どうだろう？　ガリ版印刷をつかっているところを見るとコピー代が高かった時代だったのかも知れないしなあ」

「知れないしなあって、あなた知らないの？」

「だって、コピーすること自体に、あまり縁がなかったし。卒論を書くときに大学図書館で資料のコピーを大量に取ったけど、助教の先生の所へ請求が来ただけで自分が直接払った訳じゃないんだ」

「ふうん」

たった二歳違いでジェネレーションギャップを感じてしまった。

「ねえ？　あの人、弟さんが亡くなったって言ってたじゃない。いつかわからないの？」

「さあ？　……でも俺が知らないんだから、高校時代かそれ以前のことだろうな」

「そう」

「あ」

「何よ、急に」

「ひょっとしたら、小さい頃に兄弟が死んだから名前を変えたのかも知れないな、戸籍上

の名前はそのまま残るから、公的資料は裕二で、つかっているのは裕一、それならあり得る。今度あったら聞いておこう」

「じゃ、じゃあ、裕一さんというお兄さんが死んだからってこと？」

「わからないよ。全部推測だもの。でも、どうしてそんなにこだわるの」

「いや、別に……」

「昔付き合っていた男に似ているとか言うんじゃないだろうな。よしてくれよ、新婚早々に」

「そんなんじゃないわよ」

似ているどころか本人だった。美紀は否定はしたものの、背中が脂汗でべっとりとしていた。裕一が裕二であることはわかった。残るは踏切事故の謎だった。

それに昼間の男の言葉も気になった。美紀には顔と身体以外に魅力がないと言われた。それを言われると夫がどうして美紀を受け容れたのかも気になってきたのだ。一郎は仕事も出来るしスポーツ万能で女の子に持てるタイプだったし、美紀が遊び人であることを受け容れるくらいに……友人からの情報だけであっただろうが……懐の大きい男だった。確かに美紀は釣り合わないと言われれば一言もなかった。

「ねえ、一つ聞いてもいい？」

「なんだよ。あらたまって」

「わたしのことどう思ってたの」

「何だ、プロポーズさせられたときのことかい」

「もし、関係を持ったことをみんなに言いふらすって恐喝されなかったとしても、プロポーズしてくれてたの？」

「ずけずけと聞くんだな。その時になってみないとわからない。でも、俺のために身を張って一生懸命な美紀を見てると、なんだか可愛く見えたんだ。これからも、可愛くしてくれよ」

「ありがとう。じゃあ、恐喝されてやむを得ずと言う訳じゃなかったんだ？」

美紀は少しだけホッとした表情になった。

でも、結婚したからと言って法的に身分は保障されているが、愛情は永遠のものとは限らなかった。一郎は子供が欲しそうだし、美紀もあの職場は快適だが、あまり長くいるべきではないと思い始めていた。

「そう言えばさ」

一郎が寝る前に話した。

「美紀の話していた、中野のことだけど……」

「中野さんがどうしたの？」

美紀はパジャマに着替え目覚まし時計をセットし、そして布団をめくった。

「あいつも半年ほど前に、今付き合っている彼女と結婚するかもしれないと言っていたんだ。俺の結婚式のときに左手の薬指にリングがなかったから、聞いてみたんだよ」

それを聞いて美紀は身体を硬直させた。布団の中だったから一郎には気付かれなかつ

たようだ。

「そ、それでどうなったの」

一郎は布団の中で向きを変えた。肩が凝っているのか、二、三回姿勢を変えうつむきで落ち着いた。

「ああ、その先は彼も話さなかった。何か口ごもっていたけど、何だか婚約破棄っぽかったから、俺も問い詰めなかった」

「そう……」

美紀は自分のことだと確信した。

だが、どうして自分だけそんな目に遭うのか、少し納得できない部分もあった。神様のいたずらにしては度が過ぎると思うのだ。遊び回っている女の子はいくらでもいるし、だからといって結婚式にそんな過去の男の一人が現れるなど、偶然にしては出来すぎている。

「美紀、もう寝たのか？」

「え、ううん、寝られないの？」

「ちょうど良かった。肩揉んでくれないか」

一郎が初めて甘えてきた、と、美紀は思った。そして、喜んで布団から起き上がった。

美紀は一郎があぐらをかくと、背中に回って細い指で背中を押してみた。固くて大きな背中だった。

「ここでいい？」

「全然効かないな。肘で突いてみて」

「うそ、後で痛くなっても知らないよ」

「美紀の腕なんかで痛くなるもんか」

美紀の肘の先が一郎のツボに当たると、気持ちがいいのか筋肉が弛緩した。顔は見えないが、呼吸が穏やかになっていった。

何となく、相手のために何かしてあげる行為の本質がわかったような気がした。一郎が子供を欲しがったのは、ひょっとしたら、一郎が子供好きのためではなく美紀自身のために言ってくれたような気がした。

「ねえ、子供が欲しいって言ってたじゃん」

「ああ……もうちょっと下を押してみて」

「あなた、子供好きなの？」

「特にそう言うわけでもないけど、俺たちの子供だったら可愛いと思わないかい」

「……思う」

美紀は一郎の背中を押す手を休めて、後ろからぎゅっと抱きしめた。一郎の鼓動が美紀の乳房を通して伝わってきた。

「やっぱり子供欲しいな……それで専業主婦になってもいい？」

「うん」

美紀は再び布団の中に入った。今度は一郎と一緒に。

次の朝、目覚まし時計のアラームより先に美紀は目覚めた。夜遅くまで起きていたはずなのに、最高の目覚めだった。さっと起きて、湯沸かしポットに水を入れてから、フ

ライパンを取り出し目玉焼きの準備をして、一郎を起こしに行った。

「おや、早いな。やけにサービスがいいじゃないか」

「変な言い方しないでよ」

コーヒーとトーストに目玉焼きと言う軽い朝食だった。夕食は、今日からスーパーに買い物に行っちゃんとしたものを作ろうと思っていた。

食事が済んでから着替えて、一郎は先に出勤していった。美紀は昨日、職場に挨拶を済ませているので三十分遅れで家を出ることにしていた。

美紀がビジネススーツに着替えようと、ブラウスのボタンをはめたときに、つけっぱなしのテレビで、インターネット上のウイルスを解説したニュースをしていた。

——ネットワーク上のノード（接点）、これがプロバイダ（接続業者）と呼ばれるもので、ここから各加入者につながっています。インターネットは一般に蜘蛛の巣のようにイメージされていますが、実際には、ごく少数、ほとんどは、三カ所程度を経由して相手とつながっています……。

美紀にはよくわからなかったが、何故か興味をひいた。

——一九五〇年代にアメリカの研究者が、興味深い実験を行いました。参加者の面識のない人物宛に、小包を送ります。相手は有名、無名を問いません。但し、送る相手は自分と顔見知りでなければなりません。

このルールをつけた途端に、参加者は届くわけがない、あるいは、何百人も経由しなければ届かないだろうと予測しました。しかし、実験結果は全く異なりました。ほとんどが、三人から五人程度経由しただけで届いたのです。大統領とはいえ例外ではありませんでした。このことから「見知らぬ人」とはいえ、三人から五人くらいの友人を通せば、いわゆる友人の友人、と言う図式が成り立つと言うことです……。

その後、このネットワークを悪用した、ウイルスの蔓延について論じていたが、美紀にはウイルスはどうでもよく、他人との関係がたった三人から五人程度で知り合いということが興味深かった。

自分と寝た男の友人の友人が、街中ですれ違っていると言う事実だ。本当ならば恐ろしかったと同時に、式場でそんな男と顔を合わせたのは確率の低い偶然ではなかったということだ。

美紀は職場に電話して今日一日休むことにした。

少し調べたいことが出来たのだ。早速、図書館の開く時間に、一番乗りして新聞のバックナンバー半年分を手に取り、閲覧スペースへ持って行った。どっこいしょとページを広げると、あの事故があった日付が正確に思い出せない。しばらく探していると見付かった。

——JR中央線踏切での人身事故。被害者は遺留品から清瀬市内の中野裕二さん、三十歳とみられる。

と、書いてあった。遺留品の中身が気になるが、免許証などなら、戸籍上の名前しか使えないからこの記事は正しいことになる。後は事故の実況見分を行った警察の検死報告書で確認するしかなかった。あの事故の後すぐに警察に行き、自分は彼の婚約者だと言って見せてもらったのだ。死亡したのは確かに「中野裕二」となっていた。惜しむらくは担当の警官が「損壊が激しいから見ない方がいいですよ」言ったので、美紀自身は名前と住所を確認しただけで、顔の確認までは行わなかったことだ。

——さてよ。

この裕二の記事の自宅住所が、美紀の彼氏の裕二のものと微妙に違っていた。近いけれども少し違う番地だった。そういうことから、事故死したのは同じ町内に住んでいた同姓同名の別人という可能性が出て来た。

一郎の友人であるテニス部の中野裕一は通名であり、戸籍上の名前は裕二だったのだ。そして事故で死んだのは同姓同名の中野裕二であり、美紀の彼氏の中野裕二ではなかったことになる。

一郎の言によれば、小さいときなどに兄弟が亡くなったりしたとき、その名前を名乗ったりする習慣がある地方もあるらしかった。あのときは「今度会ったときに聞いておく」と言っていたが、多分、そう考えた方が正解だろう。他の事情は思いつかなかった。

従って、あの中野裕一は、美紀の体の隅々まで知り尽くしている男。彼に相違なかったのだ。かつてのセックスフレンドが夫の親友だった。そんな冗談みたいなことが、まさに起こったのだ。

——きまづいことこの上ない。

4.

4.

裕二の気持ちを確かめなければならない。

このままでは、この先もずっと精神的にいたぶられるだけになってしまう。

そう考え、昼から、裕二の勤める事務機器会社に張り込んでいた。彼は忙しそうに取引先に商品を届けるためにバンに荷物を詰め込んでいた。

「あの」

今度は美紀の方から声を掛けた。裕二はその前に気配に気付いていたようだった。

「まだ、何か？」

「はい、あなたは幽霊ではない。そして、本名は裕二で、通称が裕一と言うことが分かりました」

「ふっ」

彼は鼻で笑った。「それで、どうしたと言うんです」

裕二だとすると、美紀は何度も関係を持った仲であった。

「裕二なんでしょ！ どうして、知らん顔するのよ。堂々と俺の女だったやつだって言えばいいじゃない！」

「ほお、君は馬鹿だねえ。君が傷つこうが、どんな想いをしようが、今さら知ったことではないが、武内は俺の大事な友人だ。彼の奥さんが、親友のセックスフレンドだったなんて知られたくないし、彼にも傷ついてもらいたくない。傷つくのは美紀一人にしてくれ」

“裕二”は冷たい目をして言った。

「それなら、どうしたらいいのよ！」

「今まで通りですよ。わたしは、あなたを武内に紹介されただけ。あなたは、夫の友人として振る舞うわたしをそのまま受け容れてください。それで、万事おさまります」

「本当に？」

「それしかないのですよ」

「でも、裕二はわたしのこと恨んでたんじゃないの？」

「少しはね。でも、君には顔と身体以外に何の魅力もないんだ。一人の男を狂わせるほどでもない。気にしなさんな」

腹の立つアドバイスだったが、嫌なやつだと思っていた裕一がすごくいい人に思えてきた。だったらどうして強引に別れたんだろう。

「君とはどうせ、いつか別れる運命になったと思う。引き取ったのが、親友の武内だった。それだけのことだ」

「じゃあ……結婚式であんな嫌がらせをしたのはどうしてなの？」

「嫌がらせ？ 何のことだい？ 全部、君思い込みで自縄自縛になっただけだろう。俺

は何もしゃいない。する気もない。本当は結婚式の案内を見たときに欠席しようとしたんだ。けれど、武内からぜひにと頼まれて、出席した。それだけだ」

裕一は吐き捨てるように言った。

「そう。じゃあ、本当に町で出会っても、こんにちは、だけで過ぎちゃうよ」

「それが一番だ。もう仕事があるから。じゃあな」

裕一はバンに乗り込み配達先に行ってしまった。

その後ろ姿を見た、美紀は裕二の紳士的態度と、本気で一郎のことを大事な友人と言っていたその言葉に嘘はないようだと思信することが出来た。

——では、最初に裕二の事故の後、電話をかけてきた女の人って誰だったんだろう？

多分、別れを告げた直後で自殺と疑ったくらいだから、単なる間違い電話を、裕二の母親からと勘違いしただけの可能性があった。それも、お葬式に顔を出していれば後々になって悩まなくて良かったのだ。

今日は、仕事を休んだが、夕刻、会社に顔を出して上司に妊娠したら退職する考えていることを、あらかじめ挨拶をしておいた。

「そう。まあ、本社営業部の武内さんの内助の功を果たした方が、好ましいかも知れませんね」

所長もそう言った。この営業所は既婚女性が辞めるまでの職場になっていたのだが、最近の風潮で辞めない人が多くなっているらしかった。だから、美紀が辞める意向を表明したときには嬉しそうな顔で、報告を受け付けた。

帰り道、スーパーに寄って、夕食のおかずの材料を探した。一郎は三十歳だが、そんなに和風料理ばかりだと栄養が偏るだろうと、ビーフシチューを思いついた。安売り商品でいいと言っていたので、チラシの品を中心に買い物した。

社宅で、洗濯物をたたんで、それから、風呂桶を洗い、夫の帰宅に合わせて沸騰スイッチを入れる準備だけしておいた。料理のシチューは時間を掛けて煮込んだ方が美味しいので、じっくりと煮込んだ。

十時頃、夫が帰ってきた。

美紀はいそいそと迎え、風呂に入れた後、料理を食べてもらった。

「急に奥さんらしくなったね」

「えへ、人に尽くす喜びを悟ったと言うことかな」

「何だよ、それ」

「細かいことは言えないんだけど.....わたし、今まで人から愛されようとするこ

りに神経をすり減らしてきたんだけど、これからはあなたに尽くすことを生き甲斐にするの」

「それは、有り難いことですな。すぐに飽きるなよ」

「わかっていますよ。お代わりはどう？」

「ああ……」一郎はスプーンを見つめ、少し考えて口を開いた。「じゃあ、これ、もう一杯くれ」

一郎は、ビーフシチューをお代わりした。そして「美味しい」と言ってくれた。たったそれだけのことだったが、美紀には嬉しいことに感じた。了

祝福された花嫁

著 黒川文

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
